

2014年度自己点検・評価報告書(シート)

【目標の進捗状況(達成度)評価・報告】(最終年度)

《大学》

担当(記述)部局は、 ☆印の箇所を記入してください。

I. 評価項目・要素と担当部局

本報告書(シート)の自己点検・評価項目・要素と担当部局は次のとおりである。

対象部局	総合政策研究科
大項目	6 教育内容・方法・成果 (研究科)
中項目	6.3 教育方法
小項目	6.3.1 教育方法および学習指導は適切か。
要素	教育目標の達成に向けた授業形態(講義・演習・実験等)の採用 履修科目登録の上限設定、学習指導の充実 学生の主体的参加を促す授業方法 研究指導計画に基づく研究指導・学位論文作成指導(院) 実務的能力の向上を目指した教育方法と学習指導(専院)
小項目	6.3.2 シラバスに基づいて授業が展開されているか。
要素	シラバスの作成と内容の充実 授業内容・方法とシラバスとの整合性
小項目	6.3.3 成績評価と単位認定は適切に行われているか。
要素	厳格な成績評価(評価方法・評価基準の明示) 単位制度の趣旨に基づく単位認定の適切性 既修得単位認定の適切性
小項目	6.3.4 教育成果について定期的な検証を行い、その結果を教育課程や教育内容・方法の改善に結びつけているか。
要素	授業の内容および方法の改善を図るための組織的研修・研究の実施

II. 目標の進捗状況(達成度)評価と報告【2014.4.30現在】

《進捗状況(達成度)評価》

本項目において、2009年度～2013年度の中期的な「目標」と「指標」を次のとおり設定し、毎年度進捗状況(達成度)の自己評価を行っている。進捗状況(達成度)評価は、目標の2014年4月30日現在における進捗状況(達成度)の評価(2013年度1年間の活動評価ではなく、2014年4月30日現在で目標がどこまで進んだかの評価)であり、A、B、C、Dの4段階で行ったものである。A、B、C、D評価の基準は目安として次のようなものである。

- A : 目標実現のための計画や方策などを適切に実行し、目標を達成している。もしくはほぼ達成している。
 B : 目標実現のための計画や方策などを概ね適切に実行しているが、まだ目標は達成していない。
 C : 目標実現のための計画や方策などを実行しているが十分ではなく、目標は達成していない。達成にはまだしばらく時間がかかる。
 D : 目標実現のための計画や方策などを実行していない。当然目標は達成していない。

2009年度に設定した「目標」	左記目標の「指標」	進捗状況(達成度)評価				
		2009	2010	2011	2012	2013
1. 院生の研究や論文執筆に向けて、マスター・セミナーを通じた指導教授のもとでの指導の徹底と本研究科がもつ学際的な教育環境をうまく連結させる教育指導体制を2011年度までに検討し、実施に移す。	→新たな教育指導体制の実施の有無。	B	B	A	A	A
2. 院生による授業評価を通じた教育方法や授業への要望をくみ取る仕組み、また教員と院生の間のフランクな形でのコミュニケーションを図る仕組み・場(欧米の大学で行われているドーナツアワー等)の設置を2010年度から実施する。	→院生と教員がコミュニケーションを図るための場の開催回数。	A	A	A	A	A
3. 院生の授業や学内行事(リサーチ・コンソーシアム等)への出席状況や取り組み姿勢について調査・検証し、教員へフィードバックする仕組みを2010年度中に検討し、実施に移す。	→院生の授業への出席回数、学内行事への出席者数。	C	B	A	A	A

☆

2010年度以降に設定した「目標」	左記目標の「指標」	2009	2010	2011	2012	2013
	→					
	→					

《進捗状況(達成度)報告》 担当(記述)部局は「指標」に基づいた報告をしてください。

上記で自己評価した目標の進捗状況(達成度)について、次のとおり説明・報告する。

目標1	A	<p>Do: 目標を達成するために、目標を設定した年度以降、どのようなことを、誰が、どのようにして、どれだけ取り組んできたか マスターセミナーを前期課程1年次より必修とし、指導教員から定期的に研究指導を受けるとともに、リサーチ・フェア(1年次)、リサーチ・コンソーシアム(2年次)での発表を義務づけ、修士論文執筆に向けた研究ステップを明確にする制度を確立している。また「院生論文集」の「修士論文特集号」を出版した。</p> <p>Check: 結果はどうであったか。良かった点・効果が上がった点は何か。課題・改善点は何か 修士論文執筆に向けたプロセスが明確化されたため、成果が上がっている。</p> <p>Action: 今後どうするのか。伸長策、改善策は何か 2016年度に予定されているカリキュラム改定ではマスターセミナーの単位数を増やす計画である。またリサーチ・フェア、リサーチ・コンソーシアムでの発表の義務化も続けていく予定である。</p> <p>その他</p>	☆ ☆ ☆ ☆
目標2	A	<p>Do: 目標を達成するために、目標を設定した年度以降、どのようなことを、誰が、どのようにして、どれだけ取り組んできたか 教員と院生のコミュニケーション、研究発表の場としてのドーナツアワー及びポリシー・ワークショップを定期的に開催している。2013年度7回開催した。また各学科目ごとに授業評価を各学期終了前におこない、教育方法や授業への要望を調査し、教育方法の改善に役立てている。</p> <p>Check: 結果はどうであったか。良かった点・効果が上がった点は何か。課題・改善点は何か ドーナツアワー、ポリシー・ワークショップも定例化し、成果も上げている。今後は大学院生の発表を増やしていくことが課題であろう。</p> <p>Action: 今後どうするのか。伸長策、改善策は何か 今後も定期的に大学院生の発表の機会としてドーナツアワーおよびポリシー・ワークショップを続けてゆく。インフォーマルな発表の場としての役割は大きい。</p> <p>その他</p>	☆ ☆ ☆ ☆
目標3	A	<p>Do: 目標を達成するために、目標を設定した年度以降、どのようなことを、誰が、どのようにして、どれだけ取り組んできたか 2011年のカリキュラム改革により前期課程の大学院生は1年次秋にリサーチ・フェアにおける発表、2年次春のリサーチ・コンソーシアムにおける研究発表が義務づけられた。発表では、さまざまな分野の教員や他の院生や参加者から質問やコメントをうける機会をもつことができる。2013年度の発表数はリサーチ・フェア20件、リサーチ・コンソーシアム15件であった。</p> <p>Check: 結果はどうであったか。良かった点・効果が上がった点は何か。課題・改善点は何か リサーチフェア、リサーチ・コンソーシアムでの大学院生の発表も効果を上げている。さまざまな専門の教員、大学院生からのコメントが修士論文の作成に大きく寄与している。</p> <p>Action: 今後どうするのか。伸長策、改善策は何か 今後も続けていく予定である。この試みはユニークかつ効果的であり、大学院生にとってはまたとない機会であろう。</p> <p>その他</p>	☆ ☆ ☆ ☆
備考			☆